

2021/8/22-2

(オマケの英語教室 photo taking) 書庫版



自分の趣味はカメラです。

我が国でそう言えば写真撮影の事だと理解されますが、外国の人は camera machine 即ち機械としてのカメラを想像するみたいで、上述の書き方だとカメラの分解、掃除、調整等カメラいじりと捉えてしまうようです。

もし写真撮影が趣味なら photo taking とか taking photo とか言った方が間違いなさそうです。

ですがこの写真撮影に当たる英語も 50 年前に自分が海外文通をしていた頃は taking a picture といっておりました。

こういった表現も時代の流れと共に変わっていくようです。

又、英語文化圏、即ち文法的に言うと S,V,O,C (主語+動詞+目的語+補語) 文化圏の人の場合は V,O の語順に倣って taking photo という人が多く、我が店の外国人従業員の母国ネパールの様に、我が国同様 S,O,C,V (主語+目的語+補語+動詞(述語) 語順の文化圏の人は photo taking を使う場合が多いようです。

更に photo taking の場合には言い方はそれだけのようですが、上の例の taking photo の場合には、ある人は taking photo といい、ある人は taking a photo 又は taking photos と言い方は人によってまちまちなような気がします。

要するに何が言いたいのかと申しますと、受験英語では答えは一つで他は全部×なのでしようが、現実の英会話の中ではそんなことはなく結構融通が利くということです。

この差は何に由来するのかと申しますと、現実の英会話の中では

「まず相手を理解しよう」

というのが何よりも第一優先なのに対して、受験英語では

「まずあらを探そう」

というのが第一優先になっているという事に由来しているようです。

言ってみれば上の英語が

「民間外交（友好）」

であるのに対して下の英語は

「政府間外交交渉（駆け引き）」

とでも申しましょうか。

そう考えると我が国の英語教育は

「国民全てを外交官（駆け引き専門家）に仕立てるが如きマニアックでトリッキーなスキル  
推奨教育姿勢」

と言っ言えなくもなさそうです。

是は教育全般に言えることですが、教育方法やその評価法が余りに厳密で細かすぎるとその思考態度や相手に対する評価基準、或いは又それに基づく相手への接し方が「極めて厳しく硬直的で寛大さの欠けたものなり、同質性の線引きや囲い込みばかりがはびこり、ひいては爪弾きや仲間はずれ、いじめや村八分の決定的な遠因」にもなりかねないような気がして深く危惧しております。

追記)

以前にも似たようなことを書きましたが、ますますその感を強くしておりますので、くどい事を承知の上で再度述べさせて戴きました。